

1 事業名

平成27年度 教育事業 「体験の風をおこそう」協賛事業  
さんりく体験！探検ツアー

2 趣旨（事業の目的）

東日本大震災から4年が経過し、被災地も徐々にではあるが復興に向かっていく。この中で、震災を「風化させない」「忘れない」ために、岩手県の将来を担う児童生徒たちが、被災地を訪問し、沿岸地域の人々と自然体験活動を通して触れ合う中で、被災地復興の現状を理解し、復興支援の一役を担う意識を高める。

3 期日 平成27年7月18日（土）～20日（月） 2泊3日

4 参加者 岩手県内の小学5年生から中学2年生 28名

5 共催 みちのく「体験の風をおこそう」運動推進協議会

6 連携・協力 NPO法人 体験村・たのはたネットワーク  
株式会社久慈グランドホテル 三陸鉄道株式会社

7 内容

(1) 日程

【1日目 7月18日（土）】

	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
受付	開 会 式	アイス ブレイク	災害時の野外炊事			入浴	避難所体験			

【2日目 7月19日（日）】

9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
岩手山青少年交 流の家→久慈市 バス移動		昼食 久慈グラン ドホテル	三陸鉄道 震災学習列車 久慈～田野畑	田野畑村 民泊体験									

【3日目 7月20日（月）】

9	10	11	12	13	14	15	16
サッパ船 体験	机浜 番屋群 見学	昼食	田野畑村→ 岩手山青少年交流の家 バス移動				閉 会 式

(2) 指導者

国立岩手山青少年交流の家	所長	松田 栄二
国立岩手山青少年交流の家	主任企画指導専門職	桑原 玲子
国立岩手山青少年交流の家	副主任企画指導専門職	中田 春輝
国立岩手山青少年交流の家	企画指導専門職	丹 康浩
国立岩手山青少年交流の家	事業推進係	中野 健二
国立岩手山青少年交流の家	事業推進係	高橋 知也
指導補助		法人ボランティア

(3) 企画のポイント

野外活動を通じて被災の状況や復興の様子を感じ取れるように、担当者は現地に足を運び連携先と綿密な打ち合わせを行った。

内容については、震災の恐ろしさよりも、復興に向かっていく前向きな状況に重点を置いた。

(4) 広報のポイント

滝沢市近隣の小中学校に約 22,000 部のガチャピン・ムックの画像を使用したチラシを配布

するとともに、本施設のホームページを活用し、幅広く企画の周知を行った。「岩手日報」に参加者募集の記事が掲載され、サッパ船に乗っている様子がNHK盛岡放送局のニュースで放映され、岩手全県下に企画事業の周知をすることができた。

#### (5) 運営のポイント

野外活動を通じて被災の状況や復興の様子を感じ取れるように、担当者は沿岸現地に足を運び連携先と綿密な打ち合わせを行った。今年度は三陸鉄道株式会社と連携し、震災学習列車を貸し切って、沿岸部での復興の様子を学習することができた。プログラムの内容については、震災の恐ろしさよりも、復興に向かっている状況に重点を置いた。

1日目は「助け合う心を学ぶ」というテーマのもと、岩手山青少年交流の家で「防災キャンプ」を行った。強化ポリエチレンの袋で無洗米の炊飯とカレー作り、段ボールを使って避難所の疑似体験を行った。

2日目は「さんりくのくらしを知る」というテーマのもと、震災学習列車乗車・民泊を行った。震災学習列車を通じて東日本大震災の被災状況と復興の現状について理解を深め、民泊では受入家庭の手伝いをし、食事をとりながら交流を深めた。

3日目は「さんりくの自然を感じる」というテーマのもと、サッパ船体験で海での野外活動を楽しんだ後、今年の春に復元された机浜番屋群の見学を行った。海の日イベントも催され、塩作りの番屋で海水から塩を作り出す工程を見学したり、漁具展示の番屋で漁具に触れたりした。

#### 8 成果とその普及

参加者の教育事業全体に関する満足度・プログラムに関する満足度は共に 100%であり、震災に関する学びに積極的に取り組みたいという気持ちが伺えた。参加者からは、「初めてこの事業に参加して、今までしたことのないことを体験することができた。いろいろな人と交流もできた。来年もこの事業に参加したい。」「炊事や民泊が思い出に残った。また参加したい。」「今回の事業に参加して震災のことを詳しく知ることができた。」という感想が聞かれた。

#### 9 今後の課題

所外での活動が中心となるために、職員の事前研修を充実させ、さらなる安全管理が必要である。参加者に事前学習の機会があればさらに復興の現状に対する理解が深まると感じる。資料の事前送付や保護者同伴の説明会等を検討しても良いと考える。

被災後の町おこしの方向性（産業・観光・防災・食文化・野外活動など）を把握し、被災地のニーズがあり、復興の様子を感じ取れるプログラムの作成が必要であり、参加しやすい日程の再検討が必要である。2泊3日、小学校高学年の震災学習のモデルケース作成・普及を目指し取り組んでいきたい。



強化ポリエチレン袋で  
カレー作り



段ボールを使って  
避難所疑似体験



震災学習列車の発車ベル  
を鳴らす松田所長



民泊先での自然体験の  
様子



サッパ船体験の様子



番屋群で塩づくりを見学